

8月5日の防空戦

栗田 尚弥

はじめに

1945年8月5日、前橋市は、米陸軍航空軍第313爆撃団の空襲にさらされた。この空襲に対し、日本軍はどのように対応したのか？

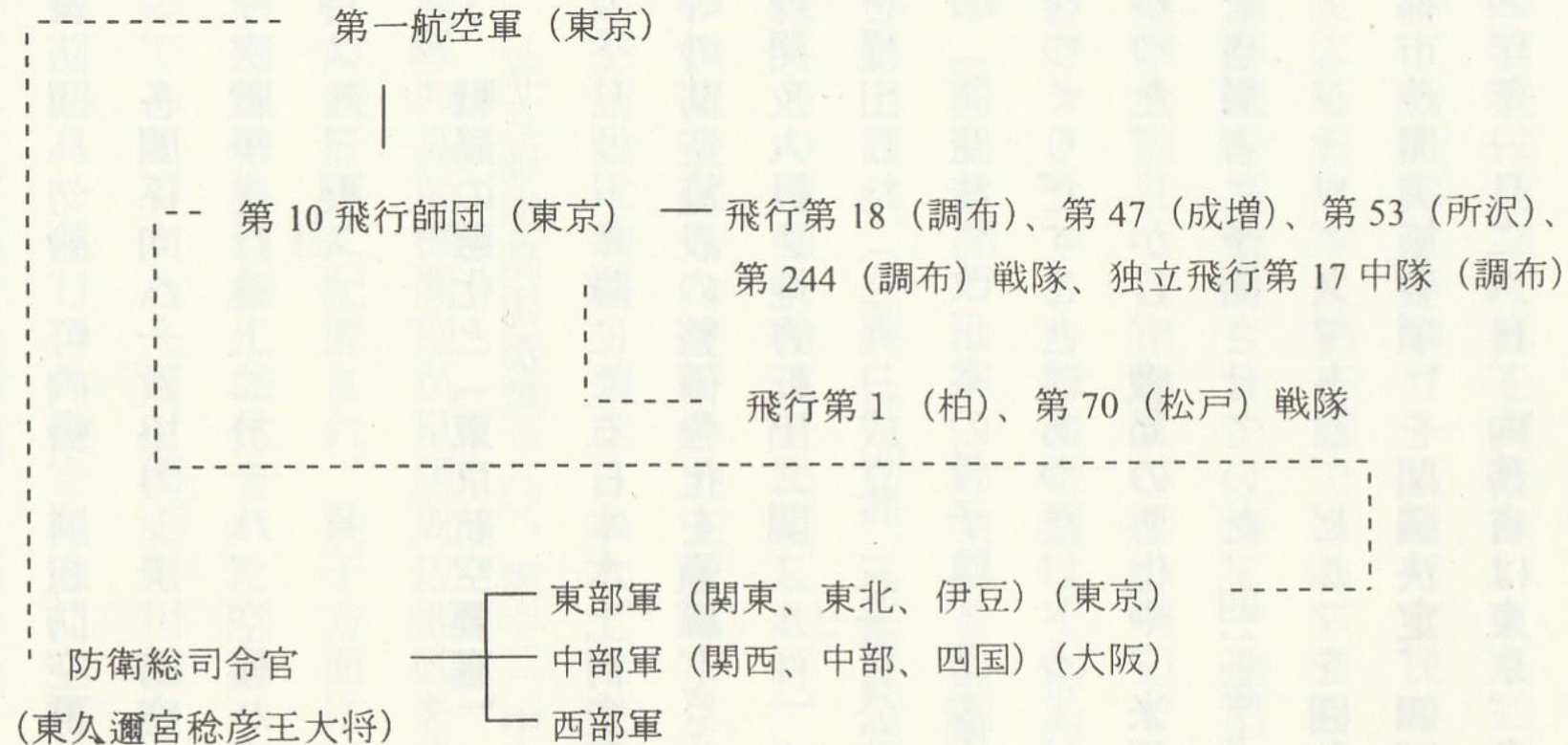
1、防空体制の整備

（１）米機動部隊進出に備えての統帥機構の改編

1944年5月－東部、中部、西部の各軍を防衛総司令官の隷下に入れ、第1航空軍を指揮下にいれる。また、これより先、陸軍防空飛行部隊の改編も行われ、3月8日、帝都防衛のため、第17飛行団が第10飛行師団に改変された。

1944年7月－大本営、本土防空作戦を含む捷号作戦準備に関する命令を下達。これにともない、横須賀－湘南地域－立川－大宮－柏－千葉を結ぶラインに東部高射砲集団（12月、高射砲第1師団）隷下部隊が配置される。また、関東各地に飛行場増設。

1944年5月時点での関東防空航空部隊



注 ——— は隷属関係を ——— は指揮関係を示す。

出典：山本茂男「帝都防空作戦記録」同編『B 29 対陸軍戦闘機隊』今日の話題社、1973年、28頁より作成。

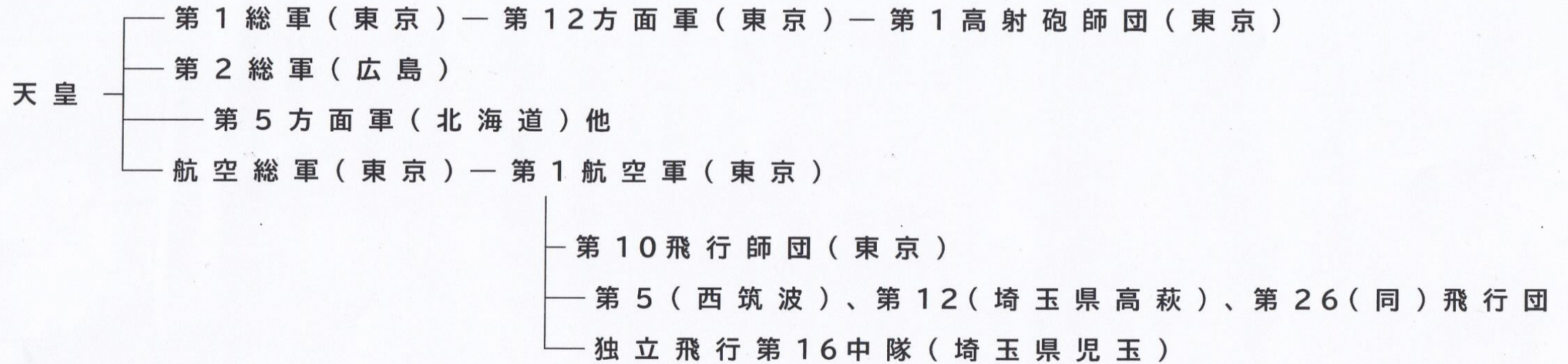
（２）決号作戦（本土決戦作戦）に基づく本土防衛作戦の整備

1945年4月－鈴木貫太郎内閣、「決号作戦準備要綱」発令。天皇直属の第1、第2総軍、航空総軍を新設。

1945年6月－「制号作戦」発令。「制号作戦」とは、「航空部隊を航空総軍が一元運用」（『高射砲戦史』）、従来の防空任務に加え、「決号作戦準備をあわせ実施」（「第10飛行師団制号作戦計画」）。

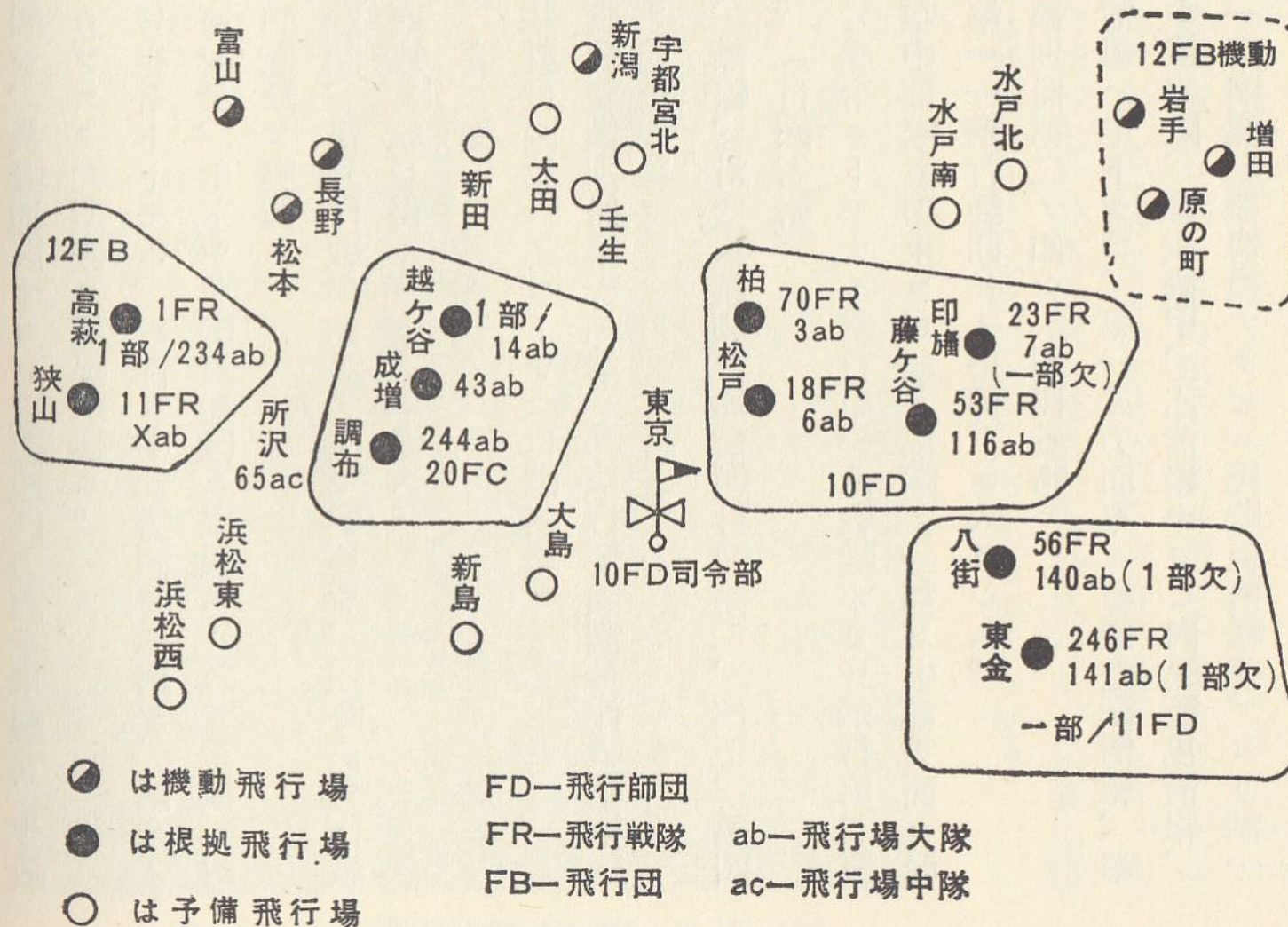
1945年7月－第20戦闘飛行集団編成。

決号作戦（本土決戦作戦）に基づく陸軍部隊配置（1945年4月）



出典：「陸海軍部隊最終配置図 陸軍部隊編」『別冊 歴史読本』特別増刊・1991夏号等より作成。

制一号 および制二号兵力配置図



出典：山本茂男「帝都防空作戦記録」同編『B29対陸軍戦闘機隊』

終戦時防空戦闘部隊配置（関東）

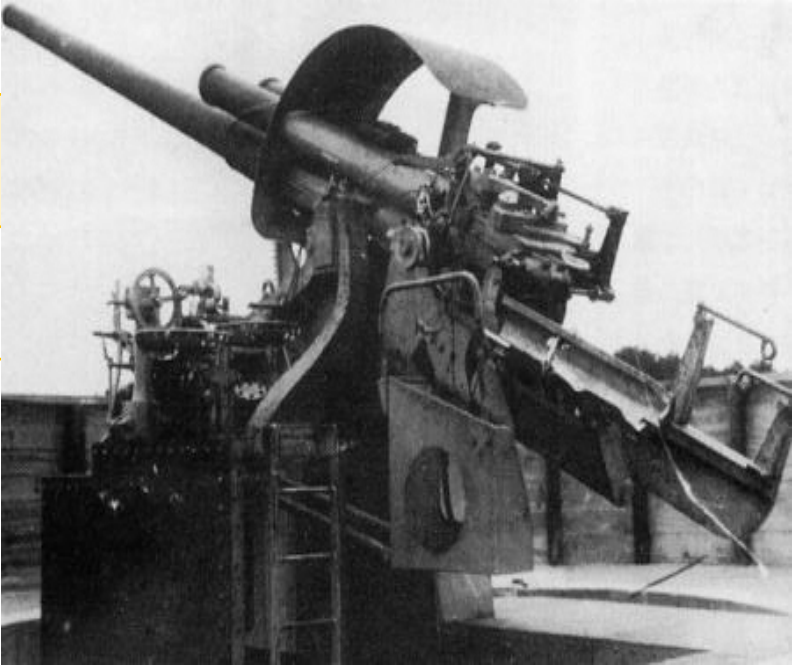
		第10飛行師団（東京）	飛行第18戦隊（松戸）
			飛行第23戦隊（印旛）
	第1航空軍（東京）		飛行第53戦隊（藤ヶ谷）
			飛行第70戦隊（柏）
航空総軍（東京）		第12飛行団（埼玉県高萩）	飛行第1戦隊（高萩）
			飛行第11戦隊（高萩）
	第20戦闘飛行集団（小牧）	第23飛行団（小牧）	飛行第112戦隊（新田）
	第6航空軍（福岡）	第16飛行団（下館）	飛行第51戦隊（下館）
			飛行第52戦隊（調布）

（３）群馬県の防空部隊

①独立高射砲第４大隊（高射第１師団麾下）

- ・本部 太田**
- ・第１中隊 太田 3式12糎高射砲 6**
- ・第２中隊 小泉（現、大泉町） 99式8糎6**
- ・第３中隊 下小林（現、太田市） 同上**
- ・第４中隊 古戸（現、太田市） 同上**

	88式 7 糎	99式8糎	3式12糎
採用年	1928年	1941年	1943年
内口径	75mm	88mm	120mm
口径	42.8	45	55.9
初速	720m／秒	800／秒	853m／秒
最大射高	9100m	15700m	14000m
発射速度	15～20発／分		15／分



日本陸軍高射砲の性能（ウィキペディアより作成）

3式12糎高射砲（ウィキペディアより）

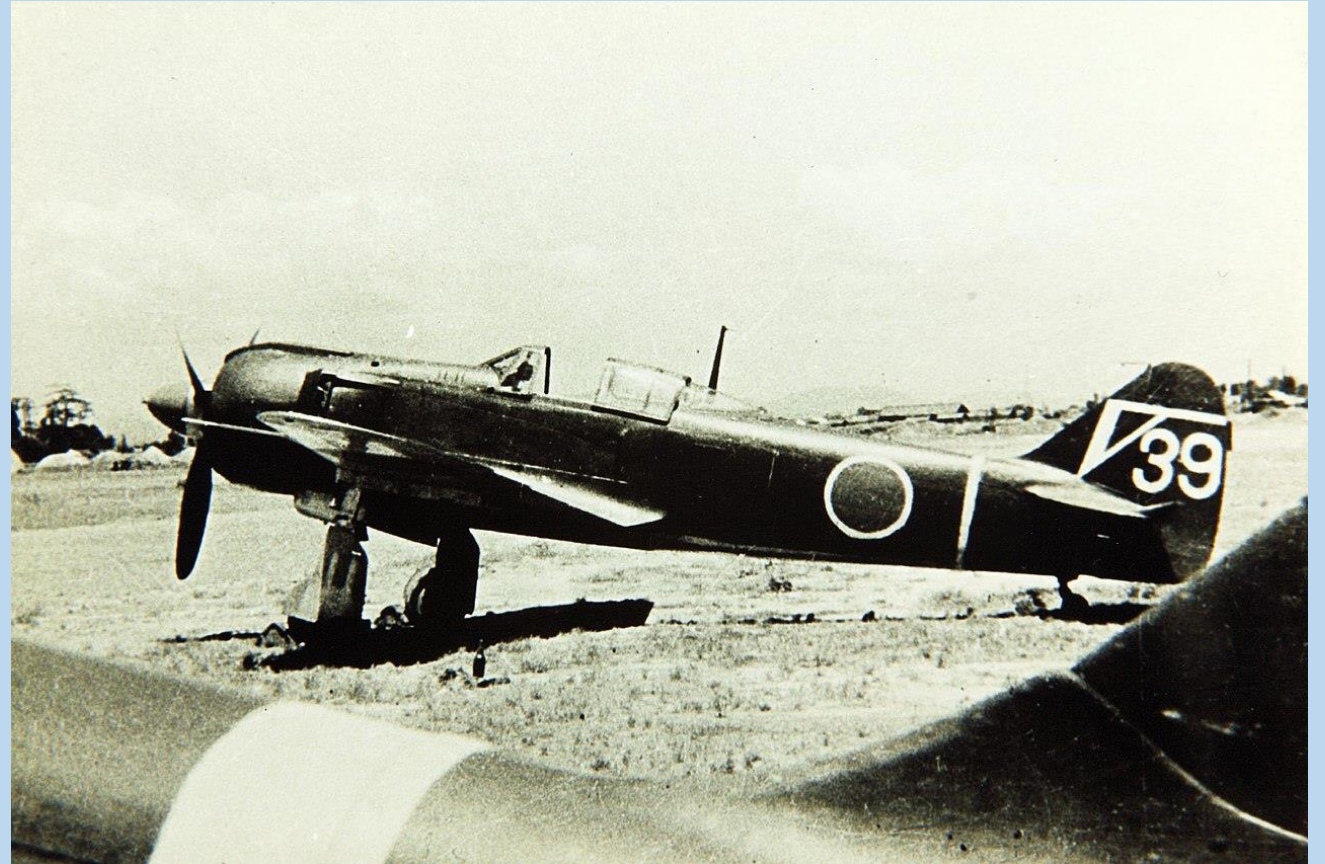
②飛行第112戦隊

- ・ 1945年7月18日、新田飛行場で編成着手。22日編制完了。

- ・ 教導飛行師団第2教導飛行隊（前橋飛行場）をもとに編成。

- ・ 航空機は5式戦40、4式戦「疾風」20

- ・ 当時の新鋭機はそろえているが…。

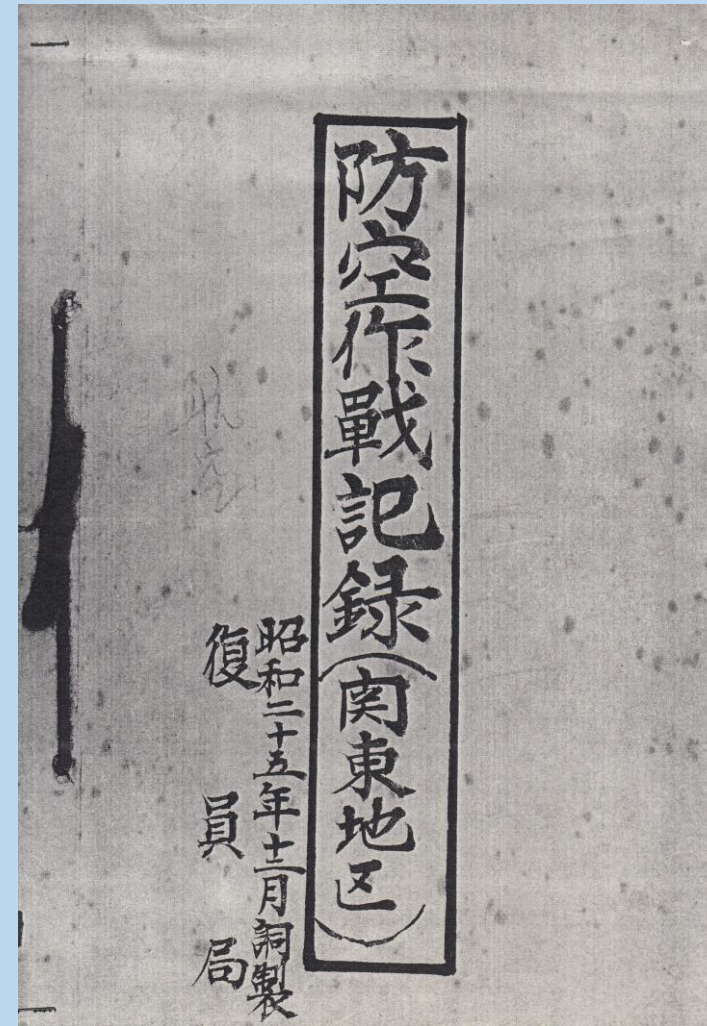


5式戦闘機（ウィキペディアより）

2、8月5日の防空戦

(1) 防空戦闘隊の行動

— 『防空作戦記録（関東地区）』（昭和25年12月調製、復員局、陸上自衛隊下志津駐屯地資料館）中の附録第16として「第10飛行師団命令」あり。



下 令	内 容
18:20	1、本夜大挙来襲の徴大なり
	2、各隊は20時迄に警戒戦備 甲の態勢に移転すべし
21:13	1、八丈南方20Kを先頭に5目標北進中
	2、各飛行隊非常戦備
21:19	112FR 4機出動 大宮上空高度5500
21:20	51FR 4機出動 岩槻上空高度5500
	53FR 4機出動 江戸川河口上空高度5000
	70FR 4機出動 川口上空高度5500
	23FR 2機出動 草加上空高度5000
21:22	53FR 4機出動 市川上空高度5500
21:31	1、30分勝浦附近敵らしき爆音
	2、70FR 更に 4機出動 浦和上空高度5000
21:33	18FR 2機出動 越谷上空高度5500
21:34	52FR 2機出動月島上空高度5500
21:35	53FR 更に 4機出動 千住上空高度5500
21:50	51FR 在空機 宇都宮上空に移れ
22:02	1、00分先頭目標は土浦附近東北北進 勝浦南方面続々北進中
	2、112FR 在空機前橋上空に移れ
22:03	53FR の千住上空の在空機 高崎上空に移れ
22:05	1、敵は下館附近より西進 前橋・高崎に向ふものの如し
	2、112FR 更に 4機出動 高崎上空高度5000
22:09	53FR 江戸川河口上空に在空機 前橋上空に移れ
22:13	53FR 市川上空の在空機 高崎上空に移れ
22:15	53FR 112FR 現在数機を常に高崎、前橋上空に在空せしめる
22:20	1FR 4機出動 前橋上空に在空せしめる
	11FR 4機出動 高崎上空高度5500
22:38	1、前橋附近に於ける敵の高度5000～6000
	2、70FR 18FR 23FR 51FR 52FRは夫々適時着陸 現在空域に現在機数を在空せしめよ
22:49	70FRの在空機、浦和を大宮に 23FRの草加を松戸に
	52FRの月島を江戸川河口上空に変更す
23:20	12FR 出動は暫時待機せよ 12FRの着陸は成増飛行場を使用せよ
24:00:00	在空機全機着陸
1:05	各隊常時戦備

出典「**第10飛行師団命令**」『**防空作戦記録**』（関東地区）

①侵入ルート of 把握

八丈南方



勝浦



土浦



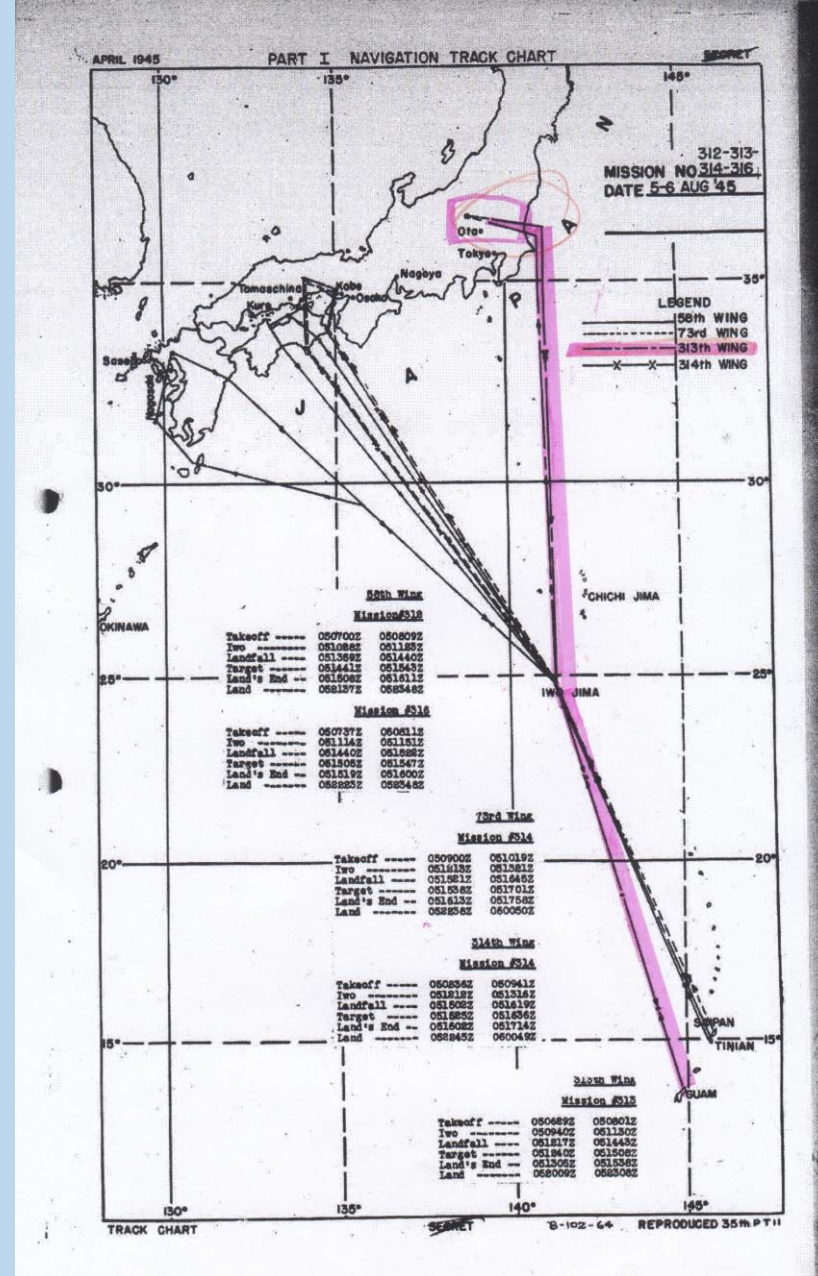
下館



前橋・高崎

※第313爆撃団の侵入ルートをはほぼ正確に把握。最初は、小笠原父島の海軍レーダー（1号1型電波探信儀か）。「5日20時に小笠原父島の電波探知機が大型機北上の報を入れる。」

（中垣秋男「回想録（陸軍少年飛行兵の記録）」『鎌ヶ谷市史』資料編Ⅳ・下、2013年）



出典：20th Air Force, Tactical Mission Report

②上空待機

18時20分－「各隊は20時迄に警戒戦備」

21時13分－「各飛行隊非常戦備」

21時19分－飛行第112戦隊（新田） 4 機、大宮上空に出動。

21時20分－飛行第51戦隊（下館） 4 機、岩槻上空に出動。

飛行第53戦隊（藤ヶ谷） 4 機、江戸川河口上空に出動。

飛行第70戦隊（松戸） 4機、川口上空に出動。

飛行第23戦隊（印旛） 2 機、草加上空に出動。

以後、第 1（高萩）、第11（高萩）、第18（松戸）、第23、第51、第52（調布）、第53、第70、第112の各飛行戦隊が上空待機。高度は、5000から5500m。ちなみに第313爆撃団の爆撃高度は、15200ft～16900ft（4632.96～5151.12m）。

③前橋上空の空中戦

22時2分－飛行第112戦隊の在空機、前橋上空へ。

22時3分－飛行第53戦隊の千住上空機、高崎へ。

22時5分－飛行第112戦隊、さらに4機、高崎上空へ。

22時9分－江戸川河口上の飛行第53戦隊機前橋上空へ。

22時13分－市川上空の飛行第53戦隊機高崎上空へ。

22時15分－第53、第112の各戦隊機、前橋・高崎上空で待機。

22時20分－第1飛行戦隊4機、前橋上空へ。

第11飛行戦隊4機、高崎上空へ。

22時38分－「前橋付近における敵の高度5000～6000」

24時－全機着陸。

④前橋防空戦に参加した飛行戦隊

飛行第1戦隊（高萩）－4式戦闘機（疾風）4機。

飛行第11戦隊（高萩）－4式戦闘機（疾風）4機。

飛行第53戦隊（藤ヶ谷）－2式複座戦闘機（屠竜）12機。

※飛行第53戦隊は、夜間攻撃を得意とする精鋭部隊、通称「猫の目部隊」。

飛行第112戦隊（新田）－多分5式戦、あるいは4式戦。8機。

なお、米軍の記録Tactical Mission Reportは、30から40機の邀撃を想定。実際に目視した日本軍機として、機種不明－30機。

双発機－5機（1機は確実にNick[屠竜]）。

機種不明機のうち1機はBaka（「桜花」）－あり得ない。

機種不明機のうち3機は、jet propelled－5式戦の排気煙か（112戦隊）。



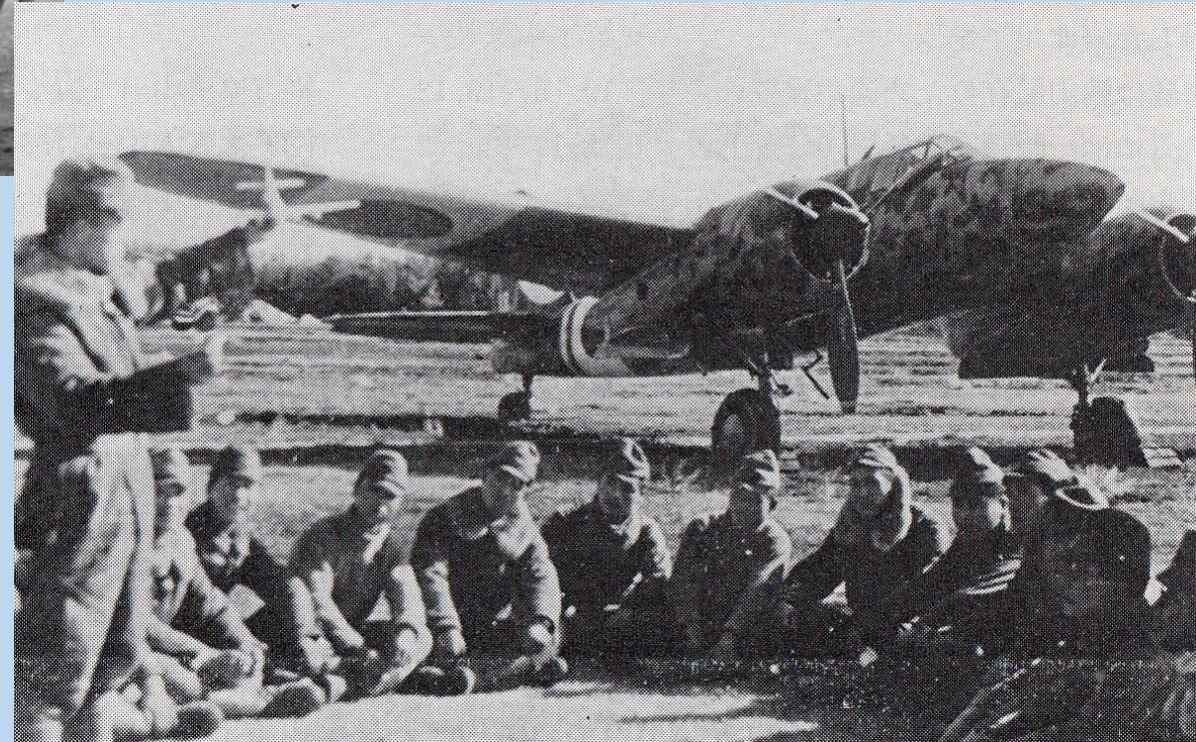
4式戦闘機「疾風」 (ウィキペディアより)



桜花 (米ウドバー・ハジー・センター蔵、栗田撮影)

飛行第53戦隊と2式複戦「屠竜」

出典：井沢保穂編『日本陸軍戦闘機隊』、酣燈社、1973年



⑤失敗した防空戦

- ・「Of 14 attacks,5 were aggressive.」 (Tactical Mission Report)
- ・「20分の飛行で前橋の上空に達したと思ふ頃、B29の焼夷弾が投下され火災が発生し利根川や市街地が見えてきた。敵の方が前橋の位置を知っていて驚いた。照空隊が駄目で敵機を捕捉出来ず、最後の燃料タンクに切り替える迄、一発も射てずに帰投した。」

(中垣秋男「回想録(陸軍少年飛行兵の記録)」)

- ・「前橋市や富山市の場合、あまりにも照空空域が狭くて、照空空域内での索敵、接敵、攻撃動作をやることができないものだった。東京の夜間迎撃で戦果をあげた理由は、照空空域が、立川から千葉まで約100キロに及ぶ区域に照空部隊が配置されていたからであった。」

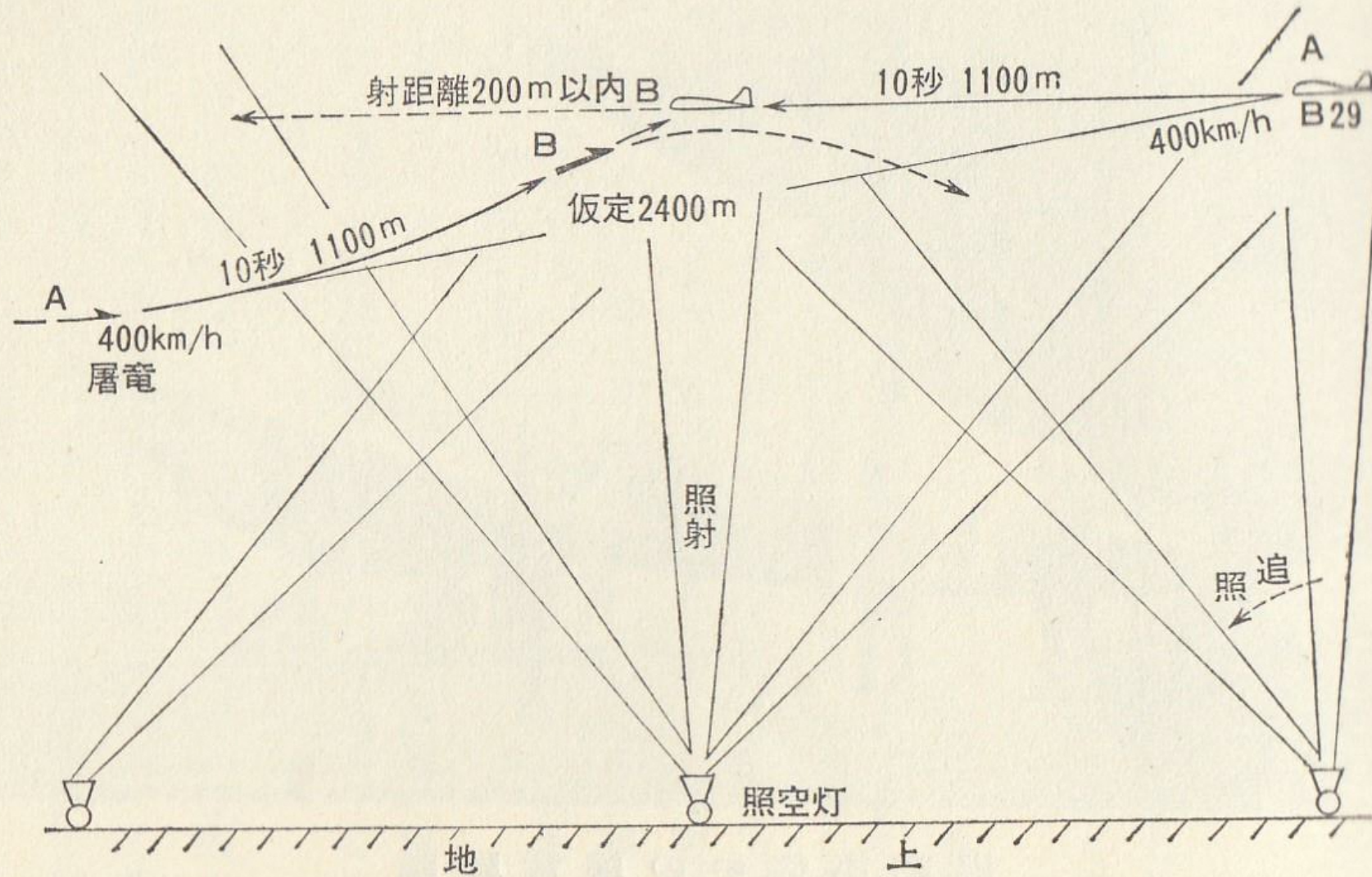
(佐々利夫[飛行第53戦隊長]「屠竜のB29 撃滅戦」『B29対陸軍戦闘機隊』)



「戦果」をあげられなかった最大の原因は、照空部隊の不足・未配置。

(米軍記録では、高崎、前橋にサーチライトを認めているが、ineffectiveとある。)

前下方攻撃要領図



出典：佐々利夫「屠竜のB29撃滅戦」

(2) 高射砲部隊

- ・ Tactical Mission Report—no anti-aircraft defenses ただし、飛行ルート上の太田には、約30門のheavy guns（実際は24門）。射高は1200ft（3657.6 m）と予測。

↓ カタログ・データ上は迎撃可能だが…。

- ・ ルート上（太田、銚子）、目標上空の対空砲火は、meager、inaccurate

↓

- ・ No aircraft were lost or damaged as a result of flak on this mission.

さいごに

※1945年8月5日の前橋空襲における米軍機の損失はゼロであった。→第313爆撃団によるワンサイドゲーム。

↓ 何故か？

- ①米軍機92機に対し、日本軍機は28機－本土決戦に備えての戦力温存のため、出撃せず。
- ②照空燈（照空部隊）の絶対的不足。－〈防空インフラ〉の未整備。
- ③飛行第112戦隊－「操縦者は96名をそろえたが、主力は若年の航士57期生と特別操縦見習士官で練度の不足はおおえなかった」
－訓練に必要な燃料も不足（『日本陸軍戦闘機隊』）。
- ③高射砲の能力不足。
- ④高射砲部隊の絶対的不足－終戦時でも群馬県には、独立高射砲第4大隊のみ。

↓ 実は、1944年の段階で。

「来襲機数の九パーセントを撃墜し、我は戦力の10パーセントを失ひたり。

此の如く、予期したる戦果を挙げざりし主原因は我の科学技術の立ち遅れに在し、その欠陥を補ふ為に無理と知りつつ無理を強行せざるを得ざりき。…今や全て遅し。依然、無理を強行する以外に手段なし。」（吉田喜八郎第10飛行師団長「昭和十九年度歳末所見」防衛研究所戦史室編『戦史叢書19 本土防空戦』、朝雲新聞社、1968年）

↓

もはや、日本には、「従来の空襲見積りと外征思想を根底からくつがえした」（『高射戦史』）B29による爆撃に対抗するだけの手段、というよりも体力がなかった。